

新鮮な土壌物理学をめざして

宮 崎 毅*

土壌物理研究会が土壌物理学会に改称されてから、2年余が経過しました。この間、河野英一初代会長は学会立ち上げに多大な貢献をされ、会則の改定、学会事務センターへの業務委託、学会誌の英文名 Soil Physical Conditions and Plant Growth, Japan から Journal of the Japanese Society of Soil Physics への改称、記念事業としての土壌物理用語事典の編集、土壌物理学会シンポジウムにおけるポスターセッションの新設など、学会と呼ぶに相応しい数々の新機軸を打ち出されました。特に、シンポジウムのポスターセッションでは、若手研究者の積極的発表が目立ち、むしろ講演会場より熱気が溢れているとの噂もあります。私は、2代目会長として、このような学会発展にご尽力頂いた初代会長に、深く感謝を申し上げたいと思います。

さて、そうはいつでも、土壌物理学会の発展は、これからの研究成果にかかっています。そこで、まず試みに土壌物理学会のホームページ <http://soil.en.a.u-tokyo.ac.jp/jssp/> を開いてみて下さい。本学会が誇る有能な事務局員により、みごとなサイトが見られます。ここに掲載される新情報は、本学会の鮮度を常に高く保つことに役立つと思います。つぎに、もう1つ重要なことは、「土壌の物理性」に掲載される論文の充実です。ここに掲載される論文は、どちらかという「風土に関連づけられた土壌物理」あるいは「地域性特殊性が強い土壌物理」を特徴としています。火山灰が多いので黒ボクやアロフェンの研究論文が多数出るとし、植物と土壌の関連も日本の植物や作物が対象です。水田を対象とした論文が多いのも当然です。日本の営農技術と関連づいた土壌の物理性試験は、本誌の古くからの十八番です。

このような特徴を有する本誌の鮮度をより高めて行くにはどうしたら良いでしょうか？それは、何と言っても先取りの精神だと思います。つまり、次の時代には日本の風土、日本の地域性のなかで必ずや問題になるであろう研究テーマの先取りです。そのようなテーマは、実は、先に述べた学会シンポジウム時のポスターセッションにおいて見られると思います。“土壌物理の最前線”とはうまいネーミングだと思いますが、文字通り最前線がそこにあるし、そうでなければいけないと思います。

すでによく知られているように、土壌学も土壌物理学も、これまでは主に農業生産の場面と関連づけられてきたのですが、最近は環境シフトが著しく強まっています。近年の社会的動向やそれを敏感に感じ取る学生諸君の動向がこれを後押ししていることは明白です。しかし一方、アジアなど海外からの留学生はむしろ従来型の農業生産と関連づけられた土壌物理を期待していることが多く、環境問題一本槍だととまどいを感じている様子さえ伺えます。それほど日本の土壌物理研究方向が急転換しているともいえます。このような情勢下にあつて、土壌物理学の鮮度を高めるための先取り精神をどのように実現していくか、学会員の皆さんと共に考えていきたいと思います。そしてその考えが若い研究者や学生、大学院生諸君と共有し会えたら更なる喜びです。(注：我が研究室のM助教授は、中学生、小学生まで視野に入っているようです。)

土壌物理学の国際化についても考えてみます。もちろん個人ベースではすでに国際的活動の中に

* 東京大学大学院農学生命科学研究科 〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1

身を置いている日本人研究者も珍しくなくなりました。しかし、この学会のあり方としての国際化はまだプログラム化されていません。英文の論文数が増えることも自然に任せています。この学会と「土壌の物理性」を国際化するにはどうしたらよいでしょうか。「風土に関連づけられた土壌物理」「地域性・特殊性が強い土壌物理」を特徴としている本学会と学会誌を、従来のこの特徴を損ねることなくさらに発展させて、国際貢献にも寄与する、そのような姿も描いてみたいところです。私が長年閲読委員を務めている Elsevier の Soil & Tillage Research 誌では、論文タイトルにスーダン、ニュージーランド、コロンビア、クロアチア、ジンバブエ、ブラジル、といった地名、国名がふんだんに出てきます。ここでは「風土に関連づけられた土壌物理」「地域性・特殊性が強い土壌物理」が国際誌上で発表されているのです。閲読しながら、いつもうらやましい気持ちになります。もし、「土壌の物理性」の論文が全部英語で書かれていたら、世界中で引用されるだろうと思います。だからといって、「土壌の物理性」を英文誌化すればいいとは少しも思いません。言葉の壁の問題、大変難しいですが、新鮮な土壌物理学をめざしてこの問題も皆さんと共に考えていきたいと思えます。